

歴史と環境をテーマに 安心して楽しめる 里海公園づくり(金沢区)

水辺のウッドデッキが地域の新たな舞台へと



水辺に向かって設置されたウッドデッキ

並木団地の真ん中にある「ふなだまり」は、池のように見えますが、海につながっている入江です。そこにあるウッドデッキでは親子がお弁当を食ったり、おしゃべりをしたり、みんなが思い思いに過ごしています。人を引き付ける気持ちの良いこの「ふなだまり」は、富岡八幡宮の祇園舟行事を行う非常に由緒ある場所でもあります。しかし、地形的に海と住宅地から流れてくるごみが溜まりやすく、以前は大人が子どもたち「汚くて、危険だから近寄ってはダメ」と言うような場でした。

並木団地に建設当初(昭和40年代)から住む高島さんは、定期的に水辺のごみ拾いをしていましたが、水面に浮かぶごみの回収は難しく、限界を感じていました。そんなある日、SUP(サップ)※で水面のごみ拾いをしていてる人を見かけます。それが富岡に住む赤澤さんでした。彼らは「ふなだまり」をもっと面白い場にした」と意気投合し、「富岡・並木ふなだまりgreen公園愛護

まりの良さを引き出し始めています。愛護会メンバーで並木団地で育った二見さんは、並木団地には様々な特技や知識のある面白い人がたくさんいるのに、その人たちと交流する機会がないことをもったいないと感じていました。それが、ウッドデッキという舞台ができたことで、地域の活動が次第に見えてきたのです。「これまで新陳代謝ができなかつたけど、ウッドデッキによって地域に意識が向いた人たちと『この町に住んでよかったな』と思う企画をやっていたい」。二見さんの言葉には、夢と可能性があふれています。

高島さん、松尾さんは「とりあえず、5年間はやってみますよ」と若い世代をバックアップする気持ちです。「水辺は



日常的に太極拳やフラダンスの練習場所にもなっている



歴史と環境をテーマに安心して楽しめる
里海公園づくり(金沢区)

整備主体…富岡並木ふなだまりgreen公園愛護会
整備場所…金沢区富岡東4丁目13番
整備内容…ウッドデッキ
竣工時期…令和2年2月

※1: Stand Up Paddle board(スタンドアップパドルボード)の略称。ボードの上に立ち、パドルを使って水面を漕いで進んでいくウォーターアクティビティ。

パワーがある。だからどう利用するかを考える人たちと共にまちをつくっていきたい。それを可能にしてくれたのは、まち普請だと思えます」とまちの未来を見つめています。

苦労があったからこそ光が見えてきた。ふなだまりの今後に注目しましょう。



近隣の小学生にふなだまりについてレクチャー。デッキが青空教室に

会」を結成します。「陸と海を同時に清掃しないと、この公園はきれいにならない」と考え、自転車やSUPを使って楽しみながら新しいスタイルの清掃活動を始めました。

40代の赤澤さんはアイデアマンで、「ふなだまりをもっとアピールするには拠点が必要だ」と、地域のボート小屋を改修するために、ヨコハマ市民まち普請事業に応募することを提案します。高島さんやメンバーの松尾さんたちは、そんな赤澤さんと周りの若い世代の熱意に押され、まち普請へ挑戦することを決めました。



座敷もあり乳幼児連れでも使いやすい。小箱ショップも併設し特産品の委託販売も行なっている

しかし、以前一緒にまち普請に応募したグループは他の活動を始めていたので、新しくメンバーを集めることになりました。鶴見区で外国人の子育て支援の仕事をしてきた福徳さんは、

整備事例 2

鶴見の多文化・多世代の 共創拠点づくり まちのリビング(鶴見区)

地域に循環を生み出す 230cafe (つみれカフェ)

ていました。

平成29年に須田さんは地域の子育てママ支援グループと一緒に、地域の拠点づくりを目的にまち普請に応募しました。二次コンテストを通過しましたが、鶴見駅周辺は家賃が高額で最終的に条件に合う物件が見つからずに辞退することになってしまいました。その後、まち普請の応募をあきらめていましたが、これまでの活動でつながったビルオーナーから「アパートをビルに建て替えるけど、2階のフロアで活動してみない？」と声をかけられます。「これを逃がせば、次のチャンスはない！」と考えた須田さんは再度まち普請に挑戦することを決めました。

無事に二次コンテストは通過したものの、権利上の問題によりボート小屋を使用することができなくなってしまうが、諦めずに、水辺にウッドデッキをつくる内容に提案を練り直しました。整備場所は変わりましたが、水辺の価値を高めることが評価され、見事二次コンテストを通過することができました。

しかし、いざ整備を始めようとした矢先、中心メンバーの赤澤さんが急逝されます。メンバーは大変ショックを受け、一時は整備をやめることも検討しますが、高島さん、松尾さんが中心となり赤澤さんの遺志を継ぐことを決意し、なんと令和2年2月にウッドデッキを完成させることができました。

コロナ禍により予定していたイベントはすべて中止となり、積極的なPRができませんでしたが、ウッドデッキを利用する人たちは徐々に増えていきます。からっと立ち寄る人以外にも、ヨガで使われたり、フラダンスグループが練習したり、小学生の野外教室など様々な使い道が生まれています。最近ではテレビ番組のロケ地となったり、アートグループから「イベントをしたい」という申し込みがあるなど、想像していなかった幅広い人たちに知られるようになってきました。ウッドデッキがふなだ